



上:「微小世界の拡大標本」(部分) 勝川夏樹 / 2016 年 / 作家蔵

下:「深い静寂 2015」小曾川瑠那 / 2015 年 / 作家蔵

【展覧会名】 企画展 「ガラスの植物園」

【会 期】 平成 30 年 4 月 21 日(土)~7 月 22 日(日)

※休館日:5 月 15 日(火)、6 月 19 日(火)、7 月 17 日(火)

開館時間 9:00~17:00(入館は閉館時間の 30 分前まで)

【会 場】 石川県能登島ガラス美術館 展示室A、D

【出品作家】 勝川夏樹、小曾川那留、佐々木類、富樫葉子、西悦子、藤原信幸(50 音順)

【作品点数】 53点

【入 館 料】 高校生以上/個人 800 円(20 名以上の団体 700 円)、中学生以下 無料

【主 催】 石川県能登島ガラス美術館(公益財団法人七尾美術財団)

【後 援】 七尾市教育委員会、NHK 金沢放送局、北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、エフエム石川、ラジオななお

【お問合せ】 石川県能登島ガラス美術館

本展担当学芸員: 米田晴子

〒926-0211 石川県七尾市能登島向田町 125-10

TEL:0767-84-1175 FAX:0767-84-1129

E-mail: [yoneda@nanao-af.jp](mailto:yoneda@nanao-af.jp)(米田)

※企画展会期中には、展示室 B・C にて当館のコレクション展示も行います。

## ■ 展覧会について

人々の暮らしの身近に存在し、季節や生命の移ろいを感じさせる植物は、人間の感覚や感情を刺激し、創作意欲を掻き立てるものとして、様々な美術分野で描かれてきました。本展では、現代の作家たちによって表現されたガラス造形を紹介します。植物が持つ自然の精緻な造形美を再現したもの、みなぎる生命力をダイナミックに表現したもの、はかなげな姿に自らの心象風景を重ね合わせたもの、土地の記憶としての植物など、植物の姿を借りて人間の普遍的なテーマを表現する作家の作品世界を体験してください。

## ■ 展覧会の特徴

### ガラスの植物

温度によって姿を変えるガラスは、有機的形態の表現を可能にする素材です。ガラス作家は様々な技法を駆使して、各々の内面世界を表現するにふさわしい形態を見つけ出し、作品として形にします。触れれば壊れそうな緊張感、反対に温かみすら感じさせるテクスチャー、透明な煌めきの中に封じ込められた記憶。ガラスだからこそ表現できる植物の姿があります。

### 花園と標本室

展示室 A では、色鮮やかな西悦子の花の作品群から始まり、小曾川瑠那の花弁を模した可憐な作品へと移ります。小曾川作品は奥へ行くほど鎮魂のための花へとトーンが変化します。どちらの作家も、花の姿に自身の記憶や心象風景を重ねます。つづく展示室 D では、一転してモノトーンの展示空間となります。藤原信幸、勝川夏樹の作品による、植物の生命力や神秘的な構造を元に構築した架空の植物の立体標本。そして、白い灰となってガラスに封じ込められた植物が押花標本のような佐々木類の作品が、静かに鑑賞者を迎えます。

### 記憶を留めるガラス

本展の出品作品には「記憶」をテーマとするものが多くあります。ある時は、心象を映し出す素材としてガラスを用い、ある時は、植物そのものを中に封じ込め、そこに込められた様々な記憶に向き合うことを鑑賞者に促し、鑑賞者自身の中にある記憶も呼び起こします。記憶し保存するという側面を持つガラスにもご注目ください。

## ■ 作家プロフィール(50 音順)



### 勝川夏樹 KATSUKAWA, Natsuki

1991 年大阪府生まれ。近畿大学でガラスを学んだ後、東京藝術大学に進学。現在、同大学院後期博士課程に在学中。植物、原生生物、菌類等をモチーフとし、生物のグロテスクともいえる形態をガラスで表現する。とくに、電子顕微鏡を通した超精密な植物の組織を要素として、そこに作家自身の感覚やイメージを加えて架空の植物を作り出すスタイルが特徴的。ミクロレベルにまで分解され再構築された植物の姿は、もはや「部分」ではなく、それ自体が一個の生命体としてエネルギーを放つ。

1. 「微小世界の拡大標本」(部分)勝川夏樹、2016年、ガラス／キャストイング、フュージング  
H35.5 x W44.0 x D42.0 cm、作家蔵



**小曾川瑠那 KOSOGAWA, Runa**

1978年愛知県生まれ。武蔵野美術大学でデザインを学んだ後、ガラス会社勤務を経て、富山ガラス造形研究所、金沢卯辰山工芸工房でガラス造形を学ぶ。身近な人の病気や介護を通じて、死と向き合う中で日々綴った言葉から生まれた花弁のシリーズ作品は、儚さの中に生の一瞬の輝きを留める。2012年に高山に工房を構えて以降、高齢化、過疎化、人のつながりを強く意識したことから、生の尊さをテーマに「鎮魂」の花を黒色ガラスで制作している。

2. 「淡い陽 2016」小曾川瑠那、2016年、ガラス／ホットワーク、キルンキャスト、コールドワーク(削り、研磨)  
H6.5 x W19.3 x D12.0 cm、作家蔵



**佐々木類 SASAKI, Rui**

1984年高知県生まれ。2008年に武蔵野美術大学でガラス造形を学んだ後、アメリカのロードアイランド・スクール・オブ・デザイン修士課程へ進み、富山ガラス造形研究所助手を経て、現在、金沢卯辰山工芸工房専門員として勤務。国内外で精力的に作品を発表する。ガラスでの作品制作をとおして「微かなつかしき」を探求する。実際のガラスを板ガラスに封じ込め、焼成した作品は、植物が持つ土地の記憶、その植物と人々の記憶をガラスで記録するものである。白い灰になった植物が照明で浮かび上がる姿は、美しく幻想的だ。

3. 「植物の記憶」佐々木類、2017年、ガラス、植物(宝円寺、金沢市)、LEDライト／吹きガラス、フュージング、コールドワーク  
サイズ可変、作家蔵



**西悦子 NISHI, Etsuko**

1955年兵庫県生まれ。1994～99年、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アート準博士課程でガラス造形を学ぶ。現在、大阪芸術大学工芸科ガラスコースの非常勤講師を務めるかたわら、川崎を拠点に作品制作を行う。一貫してパート・ド・ヴェールという鑄造ガラスの技法を用いて作品制作を行う。ガラスの繊細さ、柔らかさ、温かさという側面に着目し、それを表現する形態として花の形を選ぶ。多彩で鮮やかな色彩を持った作品のひとつひとつに花の名前が付けられており、大小さまざまな花が集まった本展での展示は、文字通り百花繚乱という言葉がふさわしい。

4. 「ジャーマンアイリス」、西悦子、2016年、ガラス／パート・ド・ヴェール  
H35.0 x W48.0 x D42.0 cm、作家蔵  
撮影：池本一三



**藤原信幸 FUJIWARA, Nobuyuki**

1958年大阪府生まれ。植物の旺盛な生命力、子孫を残すための仕組み、その結果としてある形の魅力を、ガラスの造形表現として結実させる。2009年頃より制作を始めた「小文間の植物シリーズ」では、作家が勤務する東京藝術大学取手校地のある小文間地区の植物をモチーフとし、植物の種子から着想を得たものが多いが、特定の植物ではなく、生命力を象徴するものとしての「種子」の形を探求し、表現している。

5. 「種子のかたち(小文間の植物シリーズ)2015-2」藤原信幸、2015年、ガラス/ホットワーク、フュージング、バーナーワーク  
H65.0 x W73.0 x D25.0 cm、個人蔵 撮影:小田喜逸朗

**■関連プログラム**

**スペシャルワークショップ「身近な草花で作るハーバリウム」**

身近にある植物を使って、ナチュラルなハーバリウムを作ります。

[日 時] 2018年5月4日(金)、5月6日(日・祝)  
各日 14:00～

[場 所] 別棟(旧ショップ・カフェ棟) 2F

[参加費] 1,000円

[所要時間] 約90分

[定 員] 各日20名

[対 象] 小学校高学年以上

[申 込] 事前予約制(4月5日より電話にて受付、定員に達し次第締め切ります)

※詳細は当館HPにてお知らせします。

**■広報用画像**

画像1～6を広報用にご提供いたします。

ご希望の方は下記をお読みの上、美術館担当者までお申し込みください。

担当:米田 (Email: yoneda@nanao-af.jp)

**<使用条件>**

- ・広報用画像の掲載時には各画像のキャプションおよびクレジットを明記してください。
- ・トリミング、画像への文字乗せはご遠慮ください。
- ・情報確認のため、校正紙を当館までお送りください。

以上、ご理解、ご協力のほど、何卒よろしくお願いいたします。